

「慶応四年 神戸事件を考える」

コース・専攻：国際交流・協力

グループ名：本当のラストサムライ

メンバー：深田篤（リーダー） 清水澄子（サブリーダー） 原田敬子 木下昭彦 泉地園子

【テーマ選定の理由】

国際交流・協力コースで学ぶなかで、歴史的にも重要な「維新政府が初めて行なった外交交渉」を含む「神戸事件」が、「歴史教科書に一行も載っていない」という疑問を抱いたことが、本テーマに取り組んだきっかけである。学校でも教えられていないこの事件は、歴史的意義にもかかわらず、地元神戸においてさえ十分に共有されているとは言い難い。国際都市・神戸の成立過程における国内外との摩擦や交渉の実態を、市民ならびに次代を担う子どもたちに、身近な歴史として捉えてもらいたいとの思いから活動を行なった。

【活動内容】

1. 神戸事件を知る（文献調査等）

慶応4（1868）年正月の岡山藩日置隊出発から、岡山藩兵と外国軍隊の衝突、その後神戸で行われた外交交渉、瀧善三郎の切腹による収束までの概要を文献等で調べた。

2. アンケート調査と結果

学校で教わる機会のない「神戸事件」について、どの程度認知されているのかを把握するため、主にシルバーカレッジ生を対象にアンケート調査を実施した。その結果、約六割が「知っている」「聞いたことがある」と回答した。

3. 神戸事件の舞台と備前岡山藩の足跡を訪ねて（フィールドワーク調査）

訪問先は、①瀧善三郎出生地（岡山・御津金川）、②部隊が進軍した西国街道と宿場、③衝突後に待避した裏六甲の地、④初外交と交渉結果に関する地、⑤善三郎の切腹に関わるお寺、⑥善三郎の子孫宅などである。

文献だけでは知ることのできない貴重なお話を伺い、記録することができた。

4. フィールドワークを通して考えたこと

①結句が異なる三首の辞世の句について、句碑が建立された時代背景や選者の立場を踏まえ、「鎮魂の思い」「慰霊の思い」「顕彰の思い」という三つの視点から考察した。

②神戸事件を後世に伝えるための方策として、①「神戸事件」ゆかりの歴史の道整備、②居留地周辺における神戸事件関連史跡の整備、③維新政府「初外交の地」碑の建立、の三案を考えた。

【学習を終えて】

「神戸事件」が教科書にも記載されず、さらに戦災や震災、都市再開発の中で埋もれてしまうのではないかという危機感から、後世に残し伝えるために行動することの重要性に気付かされた。

令和8年1月16日

京都 妙心寺塔頭 春浦院

瀧善三郎「収骨碑」参拝

